HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	人間の慢心を戒め、深く大地に根差して
著者	上杉，忍; UESUGI，Shinobu
引用	年報新人文学(10)：1-5
発行日	2013-12-20

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

[巻頭言]

人間の慢心を戒め、深く大地に根差して

上杉　忍

二〇一三年には、人文学部開設二〇周年と人文学会創立記念のシンポジウムが、それぞれ盛大に行われ、この『年報　新人文学』が第一〇号を迎えることとなった。

「新人文学」の提言は、人間を慢心させた人文主義に対する反省から始まったと聞いている。しかし、濱忠雄氏の「『人文主義』の意義を全否定するとしたら、それは『たらいの水と一緒に赤子を流す』のに等しい」（本誌第五号巻頭言）との指摘は、近年、とくに重要であると思う。アメリカでは反テロを口実とした愛国者法によって権力の不当捜査を禁止した憲法修正第四条が骨抜きにされ、日本では自民党憲法改正草案が、国民の権利を「公益および公の秩序」の中に閉じ込めることを主張し、自然権思想にもとづく人権概念そのものを脅かしているからだ。

とは言え、人文主義が、「文明」の名のもとに自然破壊や植民地、黒人奴隷制、人種差別、女性差別を肯定・促進してきたことは否定できない。国連が、これらを肯定する思想を克服目標に掲げたのは一九六〇年代以後のことだった。

人文主義に対して最も体系的で強力な対案を突きつけたのは、マルクスとエンゲルスだった。しかし、ロシアでレーニンが権力を奪取し、世界中に共産党という少数の結束した前衛党組織が広がり、彼らが世界各地で革命運動を展開するようになるまでは、マルクスの提起が、広く世界に知られることはなかった。「革命」によってその社会の諸問題が一気に解決されるとの「夢」がこれほど急激に世界中の大衆の間に蔓延したことは世界史上、まれなことだった。エリック・ホブズボームによれば、「その地球大の広がりは、イスラム教成立後の最初の一世紀における征服活動以来、およそ類例のないもの」（『極端な時代――二〇世紀の歴史』）だった。

社会主義国家の時代は、ホブズボームの言う「総力戦の時代」とピタリと重なる。東西を問わない国家権力を総動員した科学技術・文化政策の展開、生産力の飛躍的拡大、恒常的戦争準備、核エネルギー開発、国家機構の肥大化、農村の衰微と都市の肥大化、自然破壊、地球環境の危機が一気に進行し、人間が何でもできると言う「人間の慢心」がこれほど昂進した時代はなかった。言うまでもなく、現実の社会主義国家は、生産力至上主義と人間社会改造への「人間の慢心」の道を突き進んだ。そして、社会主義革命への道の設計図の鏡となる歴史の設計図、すなわち「史的唯物論」にもとづく理想社会への移行の必然性を説く安易な「世界史の発展法則」が大きな力を持ち、法則が裸で歩いているような歴史がたくさん書かれ「千年王国論」を支えてきた。

地球の生誕、人類の発生から、自然と人間の歴史を鳥瞰し、危機的な現代世界の将来展望を模索してきた藤岡惇は、キリスト生誕から最初の千年紀を「神のミレニアム」と規定し、次の千年紀を「自己を中心として世界が回っていると言う観念的な天動説」に染まった「人間のミレニアム」だったと整理し

た上で、第三のミレニアムの課題は、「自然のミレニアム」への転換であるべきだと提言している。（「帰りなん、いざ豊饒の大地と海に――平和なエコ・エコノミーの創造――」『立命館経済学』六〇巻特別号十一）彼によれば、マルクスとエンゲルスは『共産党宣言』で、「農業経営と工業経営の統合、農村と都市の対立の除去」を提言し、マルクスは晩年に入っても「大地への人間の回帰を『未来社会』にとっての必須条件」だと主張し続けたと言う。（「ソ連の本質は『国家産業主義』だった――大地・生産手段への高次回帰、自由時間の拡大を指標に考える」『立命館経済学』六一巻特別号十二）

では「大地への人間の回帰」はどう実現されうるのか。池澤夏樹は「目前のあまりの不正と矛盾に対する抑えようのない怒り。・・・自分の無力がわかっている分だけ苛立ちが募る。・・・一気逆転を夢見るようになる」（「終わりと始まり」『朝日新聞』二〇一三年十一月五日）のは理解できると書いている。だが、「一気逆転」の夢はもはや見ることはできない。

彼は、次のようにも書いている。「かつて『革命』という幻想がありました。革命というのは、ある思想的な原理を実行に移して、社会全体を根本的に変えるということです。・・・そういうものがみんな失われて、言ってみればわれわれは、壊れてしまった大きな物語の破片の間をうろうろしている。・・・ですから、われわれは・・・全部の問題を解決して理想の社会を作るということは考えず・・・バラバラな問題の一個ずつを、個々に何とかしていくしかないということになる。」（『世界文学を読みほどく』新潮選書、二〇〇五年）

破壊・解体も容易ではないが、建設は難しい。深く大地に根差して（歴史家なら「大衆の日常生活、あるいは生の史料」にあくまで忠実に）「バラバラな問題の一個ずつを、何とかしていく」しかない。あ

くせく新しいパラダイムを追いかけ回すのは虚しい。そのうちきっと何かしっかりしたものが醸成されてくるに違いないと心待ちにしよう。

そんなわけで、私は四年前札幌に来て以来、平取のアイヌ民族の人たちの三〇〇年かけて山を再生させる植林運動に少しばかり協力させてもらっている。

（うえすぎ　しのぶ・北海学園大学大学院教授）